

2 1 世紀の日本のかたち（5 1）

－ 祈りに込められた死を包む

東北生命の網の目社会の再生－



戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

1. 3.11 鎮魂の祈り

千年に一度の巨大地震津波が東北の太平洋岸を襲ってから一年になります。これまでに死者1万5,854人、行方不明者3,155人と報じられています。

1年経った今年3月11日午後2時46分、日本各地、東北の被災各地で死者を悼み、黙禱し手を合わせ鎮魂の祈りを捧げました。

この日時、私も宮城県の石巻市の日和山ひよりやまから、家族や友人知人を失って悲しみが消えない方々、大勢の市民、ボランティアの人々に混じって海に向かって手を合わせました。

石巻市日和山から春の海を遠望



(2012. 03. 11 戸沼撮影)

石巻の日和山は旧北上川の右岸にあって、江戸時代の船乗りたちが出航の日を見をしたという場所で、石巻湾と川筋と沿岸の街が一望できます。昨年の5月初旬に石巻を訪れた

時には沿岸の被災地は破損されたコンクリートの建物を残しつつ、一面は黒々とした泥で覆われていました。1年経ったこの日には、これがよほど片付けられ、あちこちにがれきが山積にみされておりました。今年の3.11は薄日が射し、その向こうに石巻の春の海を遠望することができました。

1年前の3.11は雪まじりの寒い日でした。そこを黒い海が津波となって襲ったのです。

全く、九死に一生を得たとは出会った多くの人々の証言でした。証言によると、母と子、父と祖父母、地域の友人どうしが、目の前で分断され、自分が“一生”を得たというのです。

今度の巨大地震津波災についてのメディアのおびただしい映像情報の陰には、実際は千人、万人の死の現場があったはずで

石巻の日和山に1時間ほど立ち尽くし、海を遠望しながら、死者はその瞬間、何を想い“生”から引き離されたのでしょうか。“生”に対して何を語ろうとしたのでしょうか。

東北の被災地を歩いていると、口の重いはずの東北の人が私などをも気遣って、車に乗りなさいよ、と声を掛けてくれます。現場にはそこに居合わせた者どうし、支え合いの気分、雰囲気を感じています。

石巻のあと、東松島の被災地を訪ね、日曜日の遊覧船が浮ぶ松島を通過して仙台に戻りました。この日、仙台市内はどこのホテルも一杯で、東北震災復旧の復興基地になっている様子でした。

翌朝、仙台から南下し、若林区、名取市、岩沼市、亘理町の沿岸部被災地を歩きました。海岸線の歯抜けとなった松林が印象的でした。総じて、被災市街地の地面は平らになり、がれきが片付けられて所々に段々状に積み上げられておりました。稼働しているがれきの焼却炉も散見されました。がれきの小山を斎場にして、前日(3.11)、鎮魂の集会をしたところもありました。

名取のゆりあげ閑上にも神を祀った10m足らずの小さな日和山があります。仙台平野はほぼ平らなので、この小山からも阿武隈川とつらなる荒浜方面の海が遠望できます。

名取市閑上の日和山



(2012. 03. 12 戸沼撮影)

丁度、災害地を巡る大型バスの一行がこの日和山に上って地元の人から説明を受けている場面にぶつかりました。1年前の3.11に黒い津波がここ仙台平野をなめつくしたこと、そして仙台平野の作物を阿武隈川を下って荒浜に運び、海へ向かう船乗りの話、海と関わる土地の歴史を学習したことでしょう。

2. どのようにコミュニティを再生するか

今年の3月11日は日曜日でしたが、仙台のホテルのロビーで見た新聞各紙は死者を悼み、被災地の復旧に取り組む現地の姿を報じておりました。地元紙、河北新報は発災直後から張り付く様に被災地についての報道を続けておりますが、この日の紙面も生き残った人々の切実なメッセージを多く記事にしておりました。

「父の愛一生分を胸に」釜石市、佐々木信彦さん(当時53) — 次女桃子さん(23)

「長女に街の復興誓う」東松島市、高橋沙織さん(当時22) — 父宗也さん

「じいじの思い出孫へ」福島県楢葉町、渡辺豊さん(当時50) — 妻悦子さん(49)

「海愛した夫一目でも」南三陸町、小山忠一さん(不明・当時70) — 妻敬子さん(69)

「長男の未来思い無念」山元町、鈴木健さん(当時36) — 父信夫さん(61)

(河北新報、平成24年3月11日)

皆、肉親を目の前で失った無念さと、そこからの立ち直り、“生”をつないで前へ進もうとする姿に胸を突かれます。

被災した東北のコミュニティ — 家族、集落、村や町は気候風土、歴史に培われた情愛の濃い人々のつながりで組み立てられ持続されてきました。これを3.11は寸断したのです。生命の網の目のタテ糸が切れ切れになったのです。

しかし、この事態にあっても地元に残り、地域社会の再生に向け、連帯して取り組んでいる大勢の人々がおられます。“死”を包み込み、新たな地域社会を築いてほしいと願います。

とはいえ、コミュニティの再生は容易なことではありません。今度の大地震がなくとも東北は少子高齢化が進んでいた地域です。広域的な視点からのコミュニティの再編成も必要でしょう。傷んだ地域を包み込む外側地域社会の網と一体となる新しいコミュニティ像も浮かびます。

この度の東日本大震災の復旧・復興活動に顕著なのは、一般の人々のボランティア、NPOなどの大きな活躍です。私の身近にも、幾度も現場に出向いてがれきを片付けたり、仮設住宅暮らしの高齢者を見舞ったりしている若い友人がおります。

韓国の友人達からは復興支援にと集めたお金を学会経由で送ってきてくれました。「学校からのまちづくり」にと、まとまった資金を提供した知り合いの財団もあります。東北への工場移転を実行に移し、進めている若い友人の企業家もいます。

金額の多寡にかかわらず寄付をする人は寄付を、時間のある人は時間を、力のある人は力を、知恵のある人は知恵を、今度の東日本大災害の復興に役立ちたいという外側の人々が大勢いるのです。

鈍くて硬い国の動きを横目に、柔軟で素早い市民活動は生命の網の目社会をつなぐ頼もしいヨコ糸にちがいません。そして情報ネットワークが現場と支援する人々をダイレクトに重層的に結びあわせている事態は、今度の大地震の復興支援の大きな特徴といってもいいのでしょう。

東北は少子高齢化、人口減少の進む日本の中でもこれが顕著な地域です。それが今度の被災で一段と進む事態に直面しています。こ

れからの日本社会の姿とも重なります。

被災地のコミュニティの再生は、死者にもつながる家族と伝統的地域のタテ糸が一つの軸であり、これを支援する外側の人々や NPO による支援のヨコ糸が重層的に組み合ったときに、新しい生命の網の目社会が生まれるのだと考えます。国や自治体はこれを支える枠組みです。

発災から1年が経ち、応急的海岸土木工事と遅れ気味のがれき処理の後に、ようやくコミュニティの再生に向けた動きが始まっています。

3.11 東北大震災の復旧復興については、いくつもの学会や協会が現地に入って活動を続けております。私の所属する日本都市計画学会（公益財団法人）もその一つで、東北在住の会員諸氏が来月4月21日、戦災復興記念会館に集まり、現場からの情報を交換し、私も共に改めて多様なコミュニティ再生の道を探りたいと思います。

(2012.03.15)

地域の希望もつなぐ「奇跡の一本松」のそばで遊ぶ子どもたち



河北新報 平成 24 年 3 月 11 日朝刊 (17 面) より